

障害者の兄弟姉妹に支援を

札幌市白石区のマンションで知的障害のある女性(40)と、世話をしていた姉の女性(42)の遺体が発見されてから20日で2カ月。同様の孤立死を防ごうと、道内各地で障害者の見守り体制を強化する動きが進んでいるが、一方で障害者本人だけでなく、同居する家族、特に兄弟姉妹への支援充実を求める声も出ている。専門家が訴えるのは、ネットワーク作りの大切さだ。【中川紗矢子】

札幌の姉妹孤立死2カ月

札幌市南区の女性(27)は、25歳と19歳の弟がともに自閉症で、上の弟には知的障害もある。5人家族で、家計を支えるのは両親。弟が通う作業所への送迎や家事など、弟たちの日常のケアは、姉が一手に担う。

負担重く「悩みを話せる場が必要」

に担う。

女性は小学4年から中学3年までの6年間、弟の障害を理由にいじめに遭った。見知らぬ子から弟の悪口を言われたり、石を投げられたりした。飼育していた動物が死んだ責任をなすりつけられたもしたという。弟が普通学級に通ったのは1年間だけだったが、いじめはその後も続いた。

念ナイスハート基金(東京都港区)は07、08年、全国の18歳以上の障害者の兄弟姉妹424人にアンケートをした。それによると「小学生の頃、(きょうだいの)面倒を将来見なければいけないと感じていた」と答えたのは、「すく」が30%、「少し」が42%。中でもその意識が高かったのは姉で、「すく」が38%、「少し」が41%と、兄や

障害者の兄弟姉妹を支援するグループは、道内に「きょうだいの会さっぽろ」「全国障害者とともに歩む兄弟姉妹の会」などがある。

間尚史さん(38)は「困ったり、助けが必要な時は、会の存在を思い出して」と話す。

問合わせは、きょうだいの会さっぽろがメール(kyodaisapporo@yaho.co.jp)、

道内にも交流組織

98年に発足した「きょうだいの会さっぽろ」は、小中学生が対象。仲間作りを目的に、年に数回、遊びや泊まりがけのイベントがある。代表の中学教諭、本

もに歩む会」は、主に大人をともに歩む会は電話(03・5634・8790)かメール(kyodainokai@yahoo.co.jp)。

いる人は、両親の注目が自分よりきょうだいに向いてしまっていることで、自尊心が低くなる傾向があるという。成長するにつれて、うつ病や摂食障害、統合失調症などを患うケースも多く「支援が急務だ」と訴える。川名紀美・日本福祉大客員教授(社会福祉)は「障害者のきょうだいは子供の時から家庭の内外で我慢しながら育ち、負担を背負って大きくなる」と指摘。「白石区のケアスを教訓に、同じような立場の人たちが悩みを打ち明け合える場を作るべきだ。兄弟姉妹への支援体制を整えば、困った時に助けも求めやすくなる」と提案している。